

響き合う言葉と生：
保苅瑞穂「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」を
めぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2022-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028622

響き合う言葉と生

——保苺瑞穂「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」をめぐって——

安 永 愛

はじめに

二〇二一年七月十日、フランス文学者の保苺瑞穂が、パリにて逝去した。享年八十三。

保苺瑞穂は『ブルースト 印象と隠喩』（筑摩書房、一九八二年）や『ブルースト 夢の方法』（筑摩書房、一九九七年）などの優れた著作を世に出し、東京大学退官後、獨協大学にて七十歳の定年まで勤め上げた後、二〇〇八年春にパリに拠点を移していた。

渡仏後の氏の文筆活動はことに目覚ましく、二〇〇九年には『ヴォルテールの世紀 精神の自由への軌跡』（岩波書店）、翌年には『ブルースト 読書の喜び 私の好きな名場面』（筑摩書房）を、二〇一四年には『恋文 パリの名花レスピナス嬢 悲話』（筑摩書房）を、その後、講談社の文芸誌『群像』での連載をまとめ、二〇一七年には『モンテーニュの書斎 「エ

「セー」を読む』(講談社)を上梓した。『モンテーニュの書齋』は第六十九回読売文学賞に選出され、二〇一八年二月の授賞式では、八十代とは思えない若々しさで記念の写真に収まっている。

その後、集英社の月刊文芸誌『すばる』で「ポール・ヴァレリー 現代への遺言―われわれはどんな時代に生きているのか」の氏の連載が始まった。二〇一九年九月号が初回連載であった。二〇二一年一月号が最終回となり、それが、保莉瑞穂の絶筆となった。

筆者にとって氏は、社会学専攻から文学研究に転じるべく、学部研究生としてフランス語を学び直していた時代から教えを賜ってきた、かけがえのない師である。ブルースト研究者、モンテーニュの良き読み手として知られる氏が、かねてからポール・ヴァレリーに深い崇敬の念を持っておられることは知っていた。そもそも、私がヴァレリーを研究対象としたのは、氏の大学院の授業でヴァレリーの『ドガ ダンス デッサン』^①を読んだことがきっかけである。ヴァレリー研究を書物の形でまとめることができないでいる私に、二〇一三年の夏にパリでお会いした際に氏が、「ヴァレリーの文章は、それ自体が宝石のようなものなのですから、その輝きに光を当てさえすればよいのです」とおっしゃったことは強く記憶に残っている。二十代半ばのヴァレリーの手になる『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』^②を再読し、行文の凄みに驚嘆したとの感想を、パリからメールでお伝えくださったこともあった。

ついに文芸誌での連載という形で本格的にヴァレリーに取り組まれることになったのだと、その必然に得心するとともに、連載タイトルの副題の「遺言」の語にいささか不穏な響きを感じた。ヴァレリーのテキストを「現代への遺言」として読む、という趣旨は勿論首肯できるものだが、それが保莉氏の「遺言」になってはしまわぬか、との思いが一瞬過ったのである。いや、あれだけお若くお元気そうな氏であるから、そんなことがあるわけがない、と即座にその不埒な思いを消し去ったのではあつたけれども。

訃報に接し、連載への感想を氏にお伝えすることができていたら、との虚しい後悔に襲われた。個人的な感想をお伝えすることが叶わなくなつた今、本稿では、この絶筆となつた本連載を取り上げ、氏の文業の意義、その文学研究の一つのスタイルとしての意義を明らかにしてみたい。なお、個人的な思い出話に終始してしまわぬよう、また歴史的敬称として、次節からはあえて名前に「氏」や「先生」を付けず、「保苺瑞穂」の表記で通すことをお断りしておく。無論、不肖の弟子として、学恩に報いたい思いに変わりはない。

一・ヴァレリー論連載まで

保苺瑞穂は、東京神田の商家に生まれた。父親の営んでいた釣具屋については、作家の開高健がエッセイ集『開口閉口』³で触れている。祖母の使っていた箱膳のこと、商家の子息として三味線を嗜んだことなど、授業やコンパの折に聞いたことがある。保苺は武蔵野西郊の小金井に自宅を構えていたが、時に東京下町っ子の根をあらわにしてくることもあり、ある教え子が港区在住だと聞くと「そういうのは「ノテ」って言うんだ」と悪戯っぽく返していた。「山の手」の「ノテ」というわけで、初めて聞く言い回しだったが、山の手インテリ家庭という、大学教師にありがちな出自ではないところが、保苺瑞穂の天衣無縫さと繋がっているのかも知れないと思ひ当たった。⁴

保苺少年は、小学校で担任の先生の『鞍馬天狗』の朗読に胸を躍らせる。ことばの世界に魅せられた最初の経験である。都立九段高校に進み、三年次に英語の教科書でキースの詩に接して虜になり、迫り来る大学受験の準備も打っちゃって、高校近くの都立図書館で洋書を借り出し、英詩に齧り付いていたという。文学部で英文学を学ぶ希望を抱いて東京大学に入学した保苺は、第二外国語としてフランス語を選び、ブルーストの『失われた時を求めて』に出会う。作品に魅了され、

保莉はそのままフランス文学研究に向かっていた。芝居好きでもあった保莉は、学生時代にモリエールの『人間嫌い』のフランス語劇にアルセスト役として出演している。こうした履歴から浮かぶことは、何より好きなものに熱中し、それに導かれて突き進んでいく一途さである。決して小賢しい優等生タイプではなかったはずだ。

学部時代に出会ったブルーストの『失われたときを求めて』に導かれて、そのまま保莉は大学院に進みブルースト研究に打ち込む。そしてフランス政府給費留学生として渡仏し、ソルボンヌ大学とパリ高等師範学校に学ぶことになる。保莉が渡仏したのは、一九六四年の東京オリンピックの開会式の直後のことで、二年半の留学を終え、一九六七年に帰国している。保莉が留学したのは、アンドレ・マルロー文化大臣⁵発案による「大洗浄」前で、パリは中世以来の煤で黒ずんだ街であったし、五月革命前夜でもあり、パリは、諸々の意味で、今より遥かに古く重々しい街として保莉の目には映ったであろう。

保莉は、ブルースト研究に確実な地歩を築いていった。四十代前半に上梓された『ブルースト 印象と隠喩』は、ブルーストの創造の美学を精細に捉え、染み通っていくような、決して止まることのない知性と感性のしなやかな動性が全編に貫かれていて、まさに目を洗われるような、感覚全体が澄明さを取り戻すような経験を読者に与える書物である。保莉が優れた研究者であるのはもちろんのこと、文章家として抜きん出た存在であることを明かしている。文学研究に転ずるため大学院に入り直した夏に初めてこの書物を読み、このような著者を師に持つことができた僥倖をしみじみと感じたものであった。

とはいえ、駒場時代の保莉は、研究者あるいは翻訳者として決して多産というわけではなかった。教養教育・学部専門教育・大学院の研究者養成が三層構造となつて、三層の全てに貢献することが求められ、ことに一九九〇年代に入つてからは文部省（のちに文科省）により絶えず改革を求められる状況であったから、東京大学駒場キャンパスの教員にとつて、

研究時間の確保は容易なことではなかったはずである。保莉は東大定年退職後、獨協大学に職を得るが、小金井の自宅から草加のキャンパスへの通勤の負担は重かったであろう。そんな中でも、保莉は二〇〇三年に、『モンテ・ニュ私記 よく生き、よく死ぬために』（筑摩書房）を上梓した。モンテ・ニュは、保莉が四十代に入った頃からブルーストと並行して強い愛着を持って読み進めていた作家である。保莉に私淑する元学生で機会を設け、保莉と食事をした際には、刷り上がったばかりの自著を手渡された。まことに美しい書物であった。一冊の書物を上梓したその充実感からだろうか、目の前の師が若返ったように感じられた。

二〇〇三年春には獨協大学で日本フランス語フランス文学会が開催され、保莉は開催校の教員としての役目を果たしていたが、その直前に、長年連れ添った夫人を急な病で亡くしていた。⁽⁶⁾学会受付ロビーで保莉を見かけ談笑していたところ、一瞬間を置いた後「実は」と切り出され、慰めの言葉も見つからなかった。

「結婚することになりました」と葉書が保莉から届いたのは、獨協大学の定年まで一年と少し、というところだった。お相手はフランス在住の長い日本人とのことで、パリ市庁舎での華やかな結婚式の様子も綴られていた。「定年後パリに拠点を移します」と書かれてあった。ともに保莉ファンを自認する元教え子とともに、居酒屋でお祝いした際には、結婚式の写真を収めたアルバムまで持参下さった。日仏の友人達に囲まれて、笑顔の弾ける新郎新婦が写っていた。古希と言われる年齢を前にして、誠に晴れやかな思い切った選択をする師に感服しきりであった。

思い出話に陥らぬよう自制していたのだが、こうして私的なことにまで言及してしまったのは、本稿で取り上げる「ポール・ヴァレリー 現代への遺言 わたしたちはどんな時代に生きているのか」という作品は、保莉の晩年の、この思い切った選択無くしては書かれ得なかったと考えるからである。

二. パリ再び—四十年の時を超えて

連載「ポール・ヴァレリー 現代への遺言 わたしたちはどんな時代に生きているのか」は、ヴァレリーの遺した言葉と、フランス文学者として生きてきた保莉の人生とが重なり合い、響き合うことよって織りなされている。単なるヴァレリーの文献研究というのではなく、かといって単なる保莉の自伝というでもない。ヴァレリーの言葉を受け止め、人生の時間と響き合わせることで生まれてきたのは、私小説的でもありながら、優れて文明論的な、単純な分類を拒むかのような散文である。このようなユニークな散文をもたらしたのは、前述したとおり、古希を目前にしてパリに居を据えるという保莉の思い切った選択であった。

二十代の終わりの二年半を留学生としてパリで過ごした保莉は、間もなくフランス文学の教師としての職を得るが、「いつかパリに帰る」との思いを心の奥底にしまいこみ、長い年月を過ごしていた。大学教員時代の保莉は、長く夫婦二人の暮らして、比較的身軽であったはずだが、不思議と渡仏には抑制的だった。大学院生だった私は保莉から「十年くらいフランスには行っていない」と伺ったこともあり、意外に感じた。それでいて、博士課程に進み、フランス文学系の就職を見据えて留学が必須となっていた教え子の私には「フランスに行くならパリに行きなさい。田舎になんか行かないで、絶対パリにしなさい。絶対に」と理由もつけず、真剣な顔で言われるのだった。

当時、日本人のフランス留学においては、パリへの集中が問題とされ、ロータリー財団などは、地方の大学を選ぶことを推奨していた。パリには日本人が多く、日本人同士で固まりがちだから、地方で学んだ方がフランス語の上達が早い、といったようなことも囁かれていた。保莉は鷹揚な人柄であり「地方でゆったりやってきたら良いよ」といかにも口にし

そうでもあると感じていたので、「絶対パリにしなさい」という命令口調にはいささか驚いたものだった。今にして思うと、留学という貴重な機会を、パリという街、その文明の姿を、しかと見、吸収することにあてて欲しい、という切なる思いからであったのだろう。

「ポール・ヴァレリー 現代への遺言―わたしたちはどんな時代に生きているのか」連載の第一回は「パリが教えてくれたこと―序に代えて」と題され、「それはある初冬の宵のことであった」(1146)の一行から始まる。武蔵野の自宅の夜の庭で冷たい雨に打たれているさずんか。保莉は「朝になれば花びらも散っているだろう」(1146)と鬱々と思いやりつつ「今ではすっかり慣れてしまったひとりきりの夕食」(1146)を終え、肘かけ椅子に坐って何気なくテレビを眺める。するとそこにはセーヌ川のボン・ヌフあたりの映像が映り込んでいて、抑えようのない懐かしさが込み上げてくる。その時の思いについて保莉は「体の芯に、眠っていた命をかきたてるような熱いものが溢れた」(1146)と記している。そのパリの映像は、妻亡き後の託び暮らしと授業や校務の疲れを拭い去るような力を持ったのだろう。しかし、それだけではなかつたのである。数週間の旅行でパリを訪れる、といったことでは気休めにしかならず、パリに腰を落ち着けて暮らすというのではなくてはならない、という思いがどこかにあったために、表向きパリを遠ざけていたかのような日々が続いたことが続くパラグラフで明かされる。保莉の中で、四十年前のパリ留学の体験は、いつでも解凍を待つかのように生き続けているのである。

老後と言われる人生の時期を、パリで過ごす決断した、その心の弾みは、以下のように描かれている。

残りの人生を賭けるつもりで、半分は運命の巡り合わせを受け入れて、もう半分は自分の意志で、力が衰え始めたからだを、若さの盛りにあったわたしを見守ってくれたパリの懐にもういちどゆだねてみよう、ここを決めたのだっ

た。(1-149)

大学の職を退き、パリに渡った保莉は、留学生だった四十年前に出会ったパリと目の前のパリとを重ね合わせながら、パリの街を歩き回る。パリの街の空気に「からだを浸」すこと、それは「ほとんど官能的な肉体の目覚め」であり「回春の沐浴」だったと記されている(1-150)。保莉の脳裏にはヴァレリーの韻文詩「海辺の墓地」^⑤がこだましてきたという。

打ち破れ、私の肉体よ、その考え込む形を！

飲め、私の胸よ、生まれ出る風を！

海から立ちのぼる爽やかさが

私に魂を返してくれる・・・ああ、潮風の力よ！

波へ走って、生きる者となって進むのだ！

「……」

風が吹き起こる・・・今こそ生きようと試みるときだ！(1-151)

ヴァレリーのこの韻文詩は、地中海を臨む生地セートの海辺を謳ったものであるが、新たに湧き起こる生命の息吹に狂喜する詩人の思いを、保莉は我が身に訪れたパリ帰還による再生の思いに重ね合わせて、さらに奮い立つ。ヴァレリーは感情に左右されない厳密な思考に徹することを自らに課し、詩から離れ、詩人として二十年もの間沈黙したのち詩作に復帰した。その事跡を保莉は踏まえている。ヴァレリーの詩「海辺の墓地」は、その中の一句を堀辰雄が小説のタイトル『風

立ちぬ』^⑩として採用してもおり、本邦でも広く知られている詩であるが、保莉は老年に至っての思いがけぬ運命の展開によつて、若い頃から親しんできた大詩人への共感の思いを、更に深めたのである。

こうして留学生時代から四十年を経て回帰したパリの街、そしてパリに住まう経験が召喚するヴァレリーのテキストが、保莉の本連載のテーマとなつていく。

三、パリが教えてくれる「時間」

保莉による本連載は、小説のようでもあり、随筆のようでもあり、作家論でもあり文明論でもあり、そうした要素が実に有機的に配置されているのだが、この連載を貫く一つの重要テーマは「時間」である。

老年に至り、四十年の時を隔てて、パリに回帰するという保莉の運命自体が稀有である。そして、そのような選択をした保莉には、何よりパリに流れる時間への愛着があつたと考えられる。保莉が四十年ぶりでパリに戻り、住むことになつたアパルトマンは、偶然にも留学生として下宿していた建物の目と鼻の先であつた。よく新聞を買つたキオスクの主人が、まだいるのではないか(当時、すでに歳を取つていたのでそんなはずはないのだが)、と思つてしまうほどに、界限は何も変わっていない。(T153) パリの街は、目抜き通りの現代風建築を別にすれば、ほとんど変わっていない。住む人が変わつても石造りのパリの建物は建て替えられたりはしないのである。この変わらないパリ、時間が滞留したかのようなパリへの愛着は、スクラップ・アンド・ビルドの東京の味気なさの裏返しでもあるだろう。

留学生だつた保莉は、よくセーヌ川にかかる橋の欄干にもたれかかつて、川の流れを眺めていたという。すると、シテ島から続くパリの街の二千年の「たゆたえども沈まず」のパリ市の紋章の銘文通りの歴史を思い、青年の青くさい悩みな

どどうでも良いものと思われ、「ちっぽけな悩みや焦りが嘘のように消しとんで」(1-150) しまったと記している。パリの街並みそれ自体が、長い人類の時間の分厚さを物語り、その中で一人の人生の時間のささやかさ、しかし豊穡さに下支えされた儂さを意識させるのである。こうした時間意識・歴史意識は、例えば「築浅」などといった条件が尊ばれ、数年単位の流行が社会のかなりを占拠するかのような日本では醸成されにくいものだと考えられる。

また、こうした人類の時間の分厚さの前提は前提として、個人の時間がどのように流れるかこそが、人間の内面にとって重要な要素となるわけだが、パリという街は静寂の中で自分自身に向き合うことを可能にすると保莉は指摘している。(1-154) それに関連して保莉はヴァレリーの講演録に啓示のような言葉を見出す。ヴァレリーの講演録「知性の決算書」の一節である。

しかし、私が言うのは、時間で正確に測られる余暇とはまったく異なるところの中の余暇のことで、それが失われつつあるということです。われわれはあの存在の深みにある本質的な静かさ、値が付けれないほど貴重なあの無我の状態を失っています。生命の最も繊細な要素はそのなかでみずみずしくよみがえって活力を取り戻すのです。そして存在はいわば過去と未来を洗い落とされて、現在の意識や、中断された義務や、待ち伏せしている期待から洗い浄められるのです……。気がかりなことも、あしたを思いわずらうことも、ここにのしかかる悩みもまったくなくて、あるものといえは一種の無我の状態での休息であり、恵みゆたかな空白であって、そのおかげで精神は本来の自由を取り戻すのです。すると精神は自分のことだけに集中するようになって、実務的な知識への義務を解かれ、目の前に迫っていることへの気づかいから解放されるのです。こうして精神は水晶のように純粋な形をしたものを作りだすことができるのです。(2-154)

「あの存在の深みにある本質的な静かさ」というヴァレリーの言葉について保莉は「前からずっと考えていたことがそこに意を尽くして書かれているではないか。私が探していたのはこの言葉だ！」(1158)とまで述べている。ヴァレリーがこの講演を行ったのは、八十年以上前のことになるが、時間に攻め立てられる二十一世紀の現在の状況を考える上でも示唆的であると保莉は指摘する。まさに、「水晶のように純粋な形をしたもの」である保莉の晩年の文業は「存在の深みにある本質的な静かさ」がパリ生活にあったことの証左ではなからうか。

保莉がパリで暮らすうち、存在感とアクチュアリティーを増していったのは、とりわけヴァレリーの同時代評や文明論であった。連載に「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」のタイトルが付されているのはそのためである。フランス文学の碩学である保莉はヴァレリーの作品に限らず多くのフランス文学作品をすでに読み、理解を深めていたわけだが、パリに暮らし、作品の描くパリの実際の情景に立ち会った上で作品に立ち返ることで「親しみ」を感じるようになったという。(1159)それは「外国」の文学として「理解」するにとどまらず、自らの感性自体が変容した故とも言えるのではないだろうか。

ともあれ、人間的な良き時間への憧れが、保莉をパリに向かわせしめ、またヴァレリーとの出会い直しを導いたと思われるのではない。

四. パリの苦難の歴史とヴァレリーの戦論・文明論

二〇〇八年春、保莉はパリに「帰還」した。一時は人生に幕を下ろすことの誘惑さえ覚えていた保莉であったが、回復期の病人のように、パリの風光に元気づけられていった。パリの生活に活力を得てみると、今度は、パリの街の経てきた

苦難の歴史にも目が向くようになる。保莉が住まうことになったのは、ブローニーの森も近いパリ十六区の上品なブルジョワ的界隈であつたが、少し目を凝らせば、そこにも歴史の悲劇の痕跡が残っているのだつた。万聖節の日、保莉は近所のある通りの角の建物の前に小さな花束が置かれてゐるのに気づく。建物にはラ・ミュエットの旧町名に変わる新しい街の名前として「マリエッタ・マルタン街」と銘板に記されていた(324)。マリエッタ・マリタンは、女流詩人で、一九四四年に強制収容所で亡くなつたレジスタンスの運動家であつた。フランス北部の街アラスに生まれたマリエッタは四歳で父を亡くし、一九一四年、第一次世界大戦が始まりドイツ軍の爆撃を受けた時、母と姉妹のリュシーとともにパリ十六区に避難してゐた。マリエッタの短い人生は、二つの戦争に翻弄される人生だつたのである(325)。保莉は、自らの住む穏やかな住宅街が、ゲシュタポとレジスタンスの闘士との間で命のかかつた緊迫した戦いの場所であつたことをまざまざと感じ、同じくパリ十六区に居を構えていたヴァレリーが二つの大戦をどのように生きたかに思いを馳せる。

ヴァレリーが二つの大戦を生き、そして大戦の終結から程なく亡くなつた詩人であることは、少しでもフランス文学史を齧つたことのある人なら、知らない人はいないだろう。保莉の筆は、ヴァレリーの戦時下の内面の動揺、不安、恐怖を伝える。筆者は、ミシェル・ジャルティによるヴァレリー評伝の⁽¹⁾一九四二年から一九四五年のヴァレリーの死までの記述の翻訳を担当したことがあり、保莉による連載よりも、はるかに詳細なヴァレリーの伝記的記述に触れていたのだが、ヴァレリーの年譜や妻や友に宛てたヴァレリーの手紙の断片を示し簡潔に敷衍するだけで、ヴァレリーの戦時下の心理を浮き彫りにする保莉の換起力は特筆すべきものである。

戦時下の危機感と不安の中で、ヴァレリーは自らの運命を変えることになる長編詩『若きパルク』の推敲を続け、一九一七年に詩の初版が刊行されると、翌日に当詩の朗読会が開催されて反響を呼び、ヴァレリーはパリ社交界の寵児となる。⁽²⁾ 戦

時下の知的公衆の不安と、ヴァレリーの詩人としての「成功」は、密接に関連している。『若きバルク』の知性の煌めきで魅了したヴァレリーにパリの知的公衆が求めたものは、自らの状況を照らし出す羅針盤、分析器としての役割であった。詩人としてデビューしたヴァレリーが旺盛に文明論を書き続けたのは、それ故であったと考えられる。

保莉はヴァレリーの文明論に、二十一世紀の閉塞感の由来、現代社会の疎外の分析、現状打破の処方箋を見る。第一次大戦から第二次大戦にかけて紡がれたヴァレリーの文明論は、同時代を照らすのみならず、二十一世紀の我々をも照らし出す射程の長いものとしてある。この保莉の見立てが、ヴァレリーの文明論の読みにアクチュアルな意味を帯びさせている。

ヴァレリーは、初めての近代戦であった第一次世界大戦が、それまでの戦争と全く様相を異にし、生命を無差別に破壊する能力を有するに至り、その規模を拡大させずにはいけないものになってしまっていることを憂慮していた。一九三一年にペタン元帥がアカデミー・フランセーズ会員に選出された際、ヴァレリーは、フランス北東部ヴェルダンの要塞をドイツ軍との激戦の後に死守したペタンに惜しみない賛辞を送るとともに、近代における戦争の狂気、その愚について論及し、旗幟鮮明に反戦を訴える大演説を打つのである。保莉は長くなるのも厭わず、ヴァレリーのこの演説原稿を引用し続ける。

第二次世界大戦時のヴァレリーは、召集された息子フランソワの安否を気遣い、精神が崩壊せんばかりだった。戦争の愚劣を憎みつつ、困難な状況の中で例えば詩の朗読会を敢行することで、精神の自由を守り抜こうとした。一九四一年、ヴァレリーはアカデミー・フランセーズにて、親交のあった哲学者のベルクソンを讃える追悼演説を行う。ベルクソンはユダヤ系の哲学者であったから、ナチスのパリ占領下にあつて、ヴァレリーのこの演説がどれほどの勇気を奮ったものであるかは同時代の人々には痛感されていた。南米ボゴタで俳優のルイ・ジュヴェはヴァレリーのこの追悼演説を朗読し、観客はスタンディングオベーションで応えたことが記録に残っている。戦時下の狂気の徴の下にあつて、正気を貫こうと

するヴァレリーの知識人としての必死の言論とその行動を、保莉の筆も必死に追っている。

保莉は、ヴァレリーの政治的言論や文明論をつぶさに検討することを通じ、ことに世界大戦がヨーロッパの人々にもたらした混乱や苦難についての認識がおろそかなままに、文学や芸術や科学の輝かしい成果にのみ心を奪われていたのではなかったかとの反省の思いに駆られている(5-305)。本ヴァレリー論連載における保莉の政治的・文明論的主題への取り組みには、何か鬼気迫るものがあるのだが、それは、ヴァレリーの文明論に改めて取り組んだから、といった単純な話ではなく、現在と地続きであるフランスひいてはヨーロッパの危機と苦難の真相を理解しなければ、およそその土壌にもたらされた文学も芸術も真に理解できるものではない、という厳肅な認識に発する焦燥感なのではないかと思われるのである。

あえて苦言を呈するならば、保莉のヴァレリーの文明論の分析に、作家個別研究上の新たな知見が多く含まれている訳ではない。同時代の人々の命運に真剣に思いを馳せ、知力の全てを上げて分析を尽くすヴァレリー、時代の危機に警鐘を鳴らし、ありうべき未来の方向を指し示そうとするヴァレリーに言論の力への信頼を見て、保莉は鼓舞され、ヴァレリーの思いを、自らはむしろ透明な媒体になることによって日本の読者に届けたいと念じていたのだろう。保莉のヴァレリーの文明論の分析においては、むしろ自らを消し、対象を指差し続けるその持続のありようが印象的である。

五. パリで生きる日常から

ヴァレリーの文明論への関心は、保莉が研究の主軸としていたブルーストと同年生まれの作家によるものであり、元々親しんでいた作家の手になるという事情もあろうが、生活者としてパリに住まう日常から自然に広がっていったものなの

ではないかと思われる。本連載の第十回と第十一回は「なぜパリでは外国人に道を尋ねるのか―国民の多様性と単一性」と題されており、フランスで暮らす日常で抱く素朴な疑問へのヒントが、ヴァレリーの著作の中に見出されるという経緯を保莉は重ねていたと見受けられる。ヴァレリーの著作は最晩年に書かれたものでも七十年以上前のものということになるのだが、アクチュアリティを失っていない。ヴァレリーは、フランスという国の成り立ちと民族的混淆の具合についても、フランス語の洗練の歴史についても、パリという都市の持つ特別に効率的な競合と代表の機能についても見事に解析し、異邦人としてパリに住まう保莉の生活実感のよって来るところを確認するのに十分な言葉を残している。それは小気味良いと言ってよいほどの切れ味なのだ。そうしたヴァレリーの文明論を咀嚼した保莉は、パリを次のように評している。見事なパリ論であり、パリで老年を過ごすことを選んだその理由、その幸福感が伺える。

フランスを鑄造したパリの坩堝は、今では国際的に多様な人種の人間たちを含み込んでパリ人に融合させ、あるいは対立させて、その知的熱気は今も衰えることを知らない。それは、私のようなパリに住む外国人にも及んできて、知らない間にパリ人に鑄造する。だからあえて言えば、パリに異邦人はいないのだ。この街に住む人間は肌の色や国籍の違いを残したまま、誰もが互いに多少はパリ人なのである。その意識がパリに独特の解放感を抱かせる。他の土地では味わったことのない自由の感覚である。私にとってパリにすむ心地よさと伸びやかさ、その最も大きな喜びの秘密はそこにあると思っている。(10-267)

保莉は、パリの居心地の良さについてこのように語っている。確かにこれがパリ生活のベースなのであろう。とはいえ、現代のパリは、ストやデモで交通機関や公共サービスが停止してしまうことも珍しくなく、テロの脅威もあって、自由の

伸びやかさの裏にはさまざまな不便やリスクもある。二〇一五年一月のシャルリ・エブド社襲撃事件や、同年十一月のパリ同時多発テロ事件の恐怖や脅威を、パリに住まう者として保莉も免れなかったであろう。

二〇一五年のパリ同時多発テロ事件の直後には、事件で妻を亡くし、一歳七ヶ月の遺児と日々を暮らすジャーナリストのアントワヌ・レリスの文章に保莉は強い感銘を受けている。レリスは、愛する妻を亡くした哀しみを堪えつつ、テロ事件実行犯に「君たち」と呼びかける文章の形で、「僕は君たちを憎むことはしない。報復はしない、報復することは暴力を力を与えてしまうことだから」と記したのである。⁽¹³⁾

フランス社会の矛盾と、その中でも人間的な寛容と勇氣ある精神で生き抜こうとする人々の姿を保莉は捉える。カフェも標的になったこの事件の後、カフェのテラスに陣取って、ヘミングウェイの『移動祝祭日』の小説を読むことがテロへの抗議の印となった。『移動祝祭日』は一九二〇年代のヘミングウェイのパリ時代を描き「もしきみが幸福にも青年時代にパリに住んだとすればきみが残りの人生をどこで過ごそうともパリはきみについてまわる。なぜならパリは移動祝祭日だからだ」の一節で知られる、まさにパリ讃歌ともいうべき作品なのだが、この本をカフェのテラスに身を晒して読むことを提案したある女性のSNS上の呼びかけが瞬く間に広がり、本書は事件直後に爆発的に売れるようになったのである。こうしたフランスの人々の反応に触れ、保莉は「何があっても愉しく生きることが一番の抵抗なのだと言わんばかりに」(4.23)と共感を込め記している。

フランス人は、不当なことに黙ってはいない。政治を遠ざげない。保莉もフランス在住が長くなる中で、そうした気質に染まっていった面もあるのだろうか、本ヴァレリー論の連載においては、驚くほど正面切って、社会や政治、文明の未来が論じられている。絵画・音楽をはじめ、芸術の目利きである保莉によるヴァレリー論連載は、芸術論が中心になるのではないかと踏んでいたが、むしろ文明論的なヴァレリーの骨格に強く保莉が惹かれているのが感じられる。

本連載の第十二回と第十三回は「ヴァレリーは二十世紀芸術をどう見ていたか」と題されているが、実際にヴァレリーが論じているのは、主として十九世紀以前の芸術であり、二十世紀の芸術は、その陰画のようなものとして示唆されるに留まっている。「それを創るのに一人の人間のいっさいの能力が使われることを必要とし、そうして創られた作品を享受するのにもうひとりのいっさいの能力が求められる」(『ドガ ダンス デッサン』)といった芸術―ヴァレリーはそれを「大芸術」と名指している―がヴァレリーの理想であったのであり、二十世紀の芸術の多くが、そうしたモデルからは後退したものとヴァレリーには見えていた。このようなヴァレリーの芸術観について保莉は次のように述べる。

実際にこの一節は彼のうちにそうした人間への全幅の信頼があつてはじめて言えた言葉なのである。私はこれを読んだときヴァレリーのうちにあふれている人間への熱い思いに感動したものだ。いきなりこう言つては唐突に聞こえるかもしれないが、わたしはここにヴァレリーの最も深いところに宿っている愛情を感じるのである。そしてほかに適当な言葉が見つからないので、を彼の人間至上主義とでも呼んでみたいのである。(14:305)

若き頃に、ブルーストの美学におけるシャルダンの絵画の意義を精細極まる筆致で明らかにし、野田弘志の写実絵画の凄みについて一文を草¹⁵していた保莉は、ヴァレリーの芸術論の詳細に立ち入り、固有名を背負った画家や個別の作品を取り上げて、ゆっくりと思索を巡らすこともできたであろう。しかし、本連載での保莉のヴァレリー論にあつては、個別の芸術作品の素地や肌理にまでは触れられていない。二十世紀以降の芸術に「衰退」を見るヴァレリーに見られる、人間の可能性にかける高邁さ、その思いの深さを文明全体に及ぶものの中で捉えようとしている。本連載における保莉のヴァレリー芸術論をめぐる回には、個別の作品世界に身を浸す時間を与えてくれる分析は残念ながらないが、現代を生きる人間

として、ヴァレリーの残したテキストの最も根源的なメッセージは何かと考え抜く保莉のユマニストとしての姿勢が鮮明に浮かびあがってくる。

六、めぐる命

武蔵野の自宅の庭の雨に打たれるさざんかの花の場面から始まった保莉の本連載は、随所に花や植物の描写が見られる。留学生としてパリで若き日を過ごしてから、四十年ののちに戻ったパリで保莉を迎えたのは、街路樹のマロニエのまぶしいような緑の若葉であり(1-149)、広場に設けられた小さな花壇の赤や白や紫の春の花であり(1-150)、以前住んでいた家の窓辺の、陽の光を射返すように咲いているゼラニウムであった(1-153)。秋の透明な光の中、黄色く色づいて風に揺れているセーヌの川岸のプラタナスの並木(3-219)、ヴォルテールが過ごし、今はヴォルテール博物館となっているフェルネーの城館の中庭のテラスの眼下に広がる野。それらが、保莉の心象風景となっている。

保莉は、この連載の第十四回と第十五回を「幻の花、パリに繚乱す」と題している。木を愛し、ドイツ占領下時代の精神的にも物質的にも苦しめられていた時期に「木についての対話¹⁶⁾」という牧歌風の対話劇を書いて人々の心を植物の世界に向けさせたヴァレリーの響みに倣い、保莉はこの連載の二つの回で人間社会を離れ、パリで出会った木や花について語っている。北国の春の始まりを告げ知らせる「幼い少女の艶やかな爪くらしいの」(14-313) 銀色に光る新芽の群れ。季節を追うように色とりどりに咲くアパルトマンの中庭の薔薇、やまぶき、リラ、紫陽花(313-314)。そして、満開の極みにあって生命の横溢していた八重桜(313-314)。それらを慈愛深く見つめる保莉が彷彿とする記述である。

強い台風のために傾いてしまった東京の家の染井吉野の伐採に立ち会うべく急遽帰国することになった保莉は、桜を連

れ添って暮らした歳月を思う。保苺の語る庭の桜の春夏秋冬は、まことに愛おしく懐かしさに包まれている。秋には枯れ葉を積み上げ、近所の子供たちと焼き芋をしたという。子を授からなかった保苺にとつての遠い日のひとときである。あれほどの落葉を落としていたのも、桜の命の盛りの証に他ならなかつたと、保苺はいざ伐採を前にしてしみじみと胸に刻む。根元から五十センチくらいところで伐採した桜の年輪の見える白い木肌に酒が注がれ、保苺は木が生き物であることを痛感し、親しい誰かを亡くしたかのように、桜の根元に力なく佇むのであった(14-316)。

庭の桜の伐採に立ち合い、木の命、木の魂のようなものを感じ取った保苺は、数年後にヴァレリーの「木についての対話」を読み、ヴァレリーが植物に寄せた洞察の深さに打たれる。保苺はこの対話編の羊飼いのチチールに向けたリユクレースの言葉を存分に引用している。保苺による引用の一部を紹介しよう。

植物は深く潜り込んだだけ、それだけ高く聳えるのだ。形なきものを繋ぎ合わせるかと思うと、空な空間に挑みかかる。植物は全てを己自身に変えるために戦っているのだ。そこが植物が持つ「観念」なのだ!・・・ああ、チチールよ、私には、植物が私に命ずるこの力強い、活動的で、自らの意図に厳密に沿ってなされる瞑想に、私の存在のすべてを上げて加わっている気がするのだ・・・(14-317)

瞑想するということは、秩序のなかに深く入り込むことではないだろうか。(14-317)

チチールよ、植物とは歌なのだ。リズムが一つの確かな形を展開させ、空間のなかに時間の神秘をあらわにする歌なのだ。(14-317)

保莉によるいずれの引用にも、木々の成長する生命の深遠な営みに感嘆するヴァレリーの感受性の豊かさが窺われる。上述した通り、ヴァレリーの「木についての対話」はドイツ占領下という非常時に書かれているのだが、何もかもが失われた日常にあつて、四季に合わせ例年と変わらず成長する植物に着目し、その営みを寿いだヴァレリーの心の動きには、コロナ禍にあつても変わらぬ植物のありように励まされるようであつたここ一、二年を振り返ってみれば、深い親しみを覚えるところではなからうか。保莉の本連載では表立ってコロナ禍のことは触れられていないが、少なくとも連載の中盤からはコロナ禍に重なつていたのであり、ヴァレリーの文明論を中心に論じる連載に植物についての回が展開されるのは、そうした事情も関わっているだろう。

「幻の花、巴里に繚乱す」と題された第十五回の連載では、留学生時代に珍しく花屋で買い生けた一輪の水仙が、部屋全体の雰囲気を一変させたこと、その不思議な力について触れたかと思うと、花の気配を読み込んだ蕪村の見事なぼたんの句へと連想が飛ぶ。留学生時代の部屋に生けた一輪の水仙の思い出は、さらに古い思い出を呼ぶ。高校三年の英語の教科書に掲載されていたワーズワースの英詩「The Daffodils」との出会いである。保莉にとつて、野に群生する水仙を謳つたこの英詩との出会いは、言葉の力、詩というものの力に触れた初めての体験だつた。「目の前に、見も知らぬ世界がぱっと拓けた気持ちになつた」(15:321)と晩年の保莉はその原体験を素朴に振り返っている。ワーズワースのこの詩に加え、漢文の教科書にあつた王維の詩が保莉に文学の力を知らしめた。

保莉は、一編の詩に受けた感動から英文科志望を決め、大学の教養課程では、堀大司のウォルター・ペイター『ルネサンス』の講読の授業に魅了される。「滾々とわき出る湧き水のような文学の汲み尽くせない清新な喜びと、それを探つては味わう文学の奥深さをほんの僅かに垣間見て、ほとんど目がくらむ思いがした」(15:322)と保莉は記している。「世間を知らない未熟なあたまで将来の職業とか、やりたい仕事とかについて思い悩むまえに」文学部という進路をいちずに決めた

若かった自分のことを、晩年の保莉は、不思議だとも振り返っている。筆者の見るところ、保莉青年は意識していなかったかもしれないが、彼には自分の感覚に信を置き、世間的な評価に惑わされない強さがあったと思う。そして何より、作品世界に真っ直ぐに届く敬愛の思い、驚異と畏怖の念があった。かのモンテーニュさえ若い頃はそうだったというが「自分を賢く見せるために」読書する、といった余計な構えがない。これは稀有のことである。

文学者としての保莉の進路を決定することになったワーズワースの「The Daffodils」の詩の挿話は、さらなる挿話を呼ぶ。須賀敦子（1929-1997）の『遠い朝の本たち』⁽¹⁵⁾に「私がはまりこんだ詩」としてこの詩のことが触れているのだ。保莉は、「遅れてやって来た読者として」⁽¹⁵⁻³²⁴⁾ 須賀敦子の本を読み始めるのだが、最初に読んだのは『ユルスナールの靴』⁽¹⁶⁾であったという。この作品はベルギー生まれの女性作家マルグリット・ユルスナールの作品と人生に、須賀の自らの軌跡と追憶を響き合わせながら紡いだ散文作品である。保莉はこの作品の文体、類例のないその話の進め方に魅了されるのだが、保莉のこの連載「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」は、まさに須賀敦子の『ユルスナールの靴』の自在な語り口を彷彿とさせるものである。連載を進める保莉の脳裏に、ユルスナールと自らの人生の記憶とを燃り合わせる『ユルスナールの靴』の鮮やかな視点の移動や巧みな対照、そして幼年期に寄せる須賀のこの上なく柔らかな情感とその文体がよぎったに違いない。かねてから、自分と同じく「フランスの精神性、合理性に初めて対決した時、その厳しさに圧倒された経験」⁽¹⁵⁻³²³⁾ ⁽²⁰⁾ を持っていた須賀に、保莉はとりわけ深い共感を覚えていたのである。文学の読み手としても書き手としても近しく感じていたその須賀敦子が、自分の感動した詩に同じく感動していたことを知って、保莉は胸をはずませる⁽¹⁵⁻³²⁵⁾。

須賀のこのワーズワースの詩についての文章は、病を得て最晩年に執筆されたものだったと保莉は記す⁽¹⁵⁻³²⁵⁾。こう記した時、保莉に残された人生の時間は一年を切っていた。その厳粛な巡り合わせに蕭然とする。植物や花のエピソード

が連なつた保莉の「幻の花、巴里に繚乱す」は、おそらく保莉自身の意図をも超えて、大いなる命の巡りを描くものとなっている。

本節の最後に、保莉の文学の根源にある美質、その感受性の特質を凝縮したような一節を掲げておこう。パリの早春の宵に咲く八重桜⁽²⁾について語つたくだりである。

この夕方、私は偶然、小さな幸運に恵まれたのだった。そして、花の命が頂点に達して、満開の桜の木全体が、しばらくの間だけに息をひそめ、不動のものとなつて、夕方の空気の中で静まり返つた瞬間にめぐりあうことができたのだ。 (14315)

七. ヨーロッパへの挽歌―ある老婦人の肖像

本連載の最終回は「ヨハン・シュトラウスが聞こえてくる部屋」と題されており、保莉が四十代のころ、サバティカルを得て夫人と共に由緒ある家系に連なるイレーム・ド・ボンシュテッテン夫人のパリの住まいの一角に仮寓した頃の思い出を中心に語られる。保莉は、本連載の冒頭で、老年に達し、四十年ぶりのパリ帰還というストーリーを描き出していたけれども、実際には、留学と老年との間に、まだ若かつた亡き夫人と過ごしたパリでの二年の歳月が存在したのである。老年に至つて保莉がパリに居を移したのは、新たな伴侶を得たことであつたから、異国での新たな一歩を踏み出すために、亡くなった夫人の思い出は封印し、独身だった留學生時代のパリと老年でまみえたパリをダイレクトに、シンプルに重ねてみる必要があるのだらう。

しかし、連載を締めくくるに至って、保莉は人生の珠玉の時であった、四十代初めのパリ滞在の思い出について語らずにはいられなかったのではあるまいか。この連載の最終回では、生い先長くはないと悟った者の、心の奥深くに仕舞われていた大切な思い出が語られている。最終回は、極めて個人的な思い出を語りながら、ヨーロッパの歴史や文化の流れを俯瞰するものにもなっている。仮寓先の家主は、保莉の筆により、ヨーロッパ文化の生んだ良心にして精華として描かれているからである。

ボンシュテッテン夫人は十九世紀の終わりに生まれた。美しい金髪に、いつも淡い色の服を身に着け、穏やかに見える夫人にも、二つの世界大戦を生き延びた強さが秘められているのを保莉は次第に感じ取るようになる。さらに、訪ねてきた夫人の娘婿が、別れの挨拶にごく普通のこととして、夫人の前に片膝をつき夫人の手の甲に口づけ、夫人の方は「王妃のように」(16-307)直立したままだったのを保莉は垣間見、ヨーロッパ古来の貴婦人への挨拶の作法が生活の中に息づいていることに目を瞠る。そして夫人の自然で優雅な姿に、保莉はヨーロッパ人の文明が頂点に達した十八世紀のヨーロッパの最良のものを見出す。

ボンシュテッテン夫人は、ソルボンヌの文明講座でフランス語を学ぶ保莉夫人のフランス語の上達を見守り、また保莉夫妻を午後のお茶にも招く。そして、夫人はふと思いついて半世紀は優に昔の新婚の頃から書き溜めた料理のレシピ本を見せてくれる。レシピ本は、保莉を二十世紀前半の苦難のヨーロッパへとひととき連れ戻す。そして歴史や思い出の詰まったレシピ本を見せてくれた夫人に保莉は格別な親しみを覚えようになる。

夫人は、日本でのブルースト研究の隆盛やブルーストの読者の多さなどについて語った保莉に「いまではブルーストは神ですものね」(16-304)と、ブルースト流行の過熱ぶりを揶揄するユーモアのこもった皮肉の言葉を返す才気も持ち合わせており、ますます保莉は夫人への敬愛の思いを深くする。保莉は、夫人が社交界のサロンで「いまではブルーストは神

ですものね」と発すれば、拍手喝采であろう、と想像と羽ばたかせる。(16-305)

ボンシュテッテン夫人の部屋からは、ヨハン・シュトラウスのワルツが漏れ聞こえてきた。華やかで優美なウイenna・ワルツは、夫人の人となり、そのイメージにいかにも重なり合うものだと保莉は感じる。十九世紀初頭に一世を風靡したウイenna・ワルツに保莉は十八世紀の残り香を嗅ぎ取り、保莉の想いは十八世紀のヨーロッパに飛ぶ。ヴァレリーは(そして、ここには直接名指されていないが、保莉の偏愛していた吉田健一⁽²⁾)十八世紀のヨーロッパに文明の最良のものを見出していたのである。保莉は以下のヴァレリーの文章を引いている。二十世紀のパリのアパルトマン部屋から十八世紀のヨーロッパは指呼の距離であるかのごとくに。

つねづね私は十八世紀の中葉を私のお気に入り時代の時代と見なしてきました。そこには私が愛するものが最高度に存在し、嫌悪するものは最低限度にしか無かったように思われるのです。

保莉は、十八世紀の中頃に名門貴族の家に生まれた政治家のタレーランの「十八世紀を生きることがなければ人は生きる喜びを知らないだろう」という言葉がかねてから気になっていた。「民主主義も自由も平等もまた未来の夢だった」(16-308)絶対王政の時代に、なぜ人は生きる喜びを感じることできたのだろうか、という問題意識を抱いていたのである。十八世紀に憧れたヴァレリーは、その歴史上稀な一時期を出現させた条件を、国や地域の個別事情を捨象した、極めて抽象度の高い定理のようなものとして提示してみせている。保莉はヴァレリーの分析に、謎を解く鍵を見つける。保莉が引用するのは、ヴァレリーの以下の文章である。

秩序は常に個人の上に重くのしかかる。無秩序は個人に公共の安寧か死を望ませる。これは二つの極端な状況であつて、人間の本性はそんな状況のなかでは寛いでいられるものではない。個人は自分をもつとも自由であり、もつとも支援を受けているようなこの上なく快適な一時期を探し求めるものである。そしてそれがある社会体制の終焉の始まりのなかに見出すのである (16:309)。

「ある社会体制の終焉の始まり」の時期の持たらず甘美な享樂。それがタレーランの言う「生きる喜び」であつたと見て間違ひはないだろう。保莉は改めてヴァレリーの慧眼に唸る。そして保莉はもう一步推察を進める。タレーランの言うのではないか、ということである。二十世紀のパリのアパルトマンで音楽を聴き、本を読み、料理をし、人と付き合ひ、そこに満ち足りて、精神のゆとりある日々を営んでいるボンシュテッテン夫人の存在こそが、それを語っていると保莉は感じ取っている。ヨーロッパ文明が残した最良のものに包まれて暮らしている夫人の心の安らぎは、仮寓していた保莉夫妻にも伝わっていた。

二年のパリ滞在を終え、東京に戻つた保莉は、ボンシュテッテン夫人と手紙のやり取りを続ける。夫人は失明の不幸に見舞われるが、四人の朗読係を侍らせて、最新刊を読んでもらい、ジッドの作品やジャック・コポーの日記、サンシモンやデイドロといった文学者たちの作品の朗読のカセットテープを取り寄せて聴いていた。夫人のその気概、おそらくはそのヨーロッパの良心たる精神の気韻にであろう、保莉は震えるほどに感動した。やがて夫人が百歳の天寿を全うしたとの知らせが家族から届く。十六回にわたつた保莉のヴァレリー論連載は、夫人への冥福を祈る言葉で閉じられている。

弘美夫人によれば、ヴァレリー論連載の終盤は、身を削るようにして書いていたとのことだ²⁸。まさに保莉の白鳥の

歌であったのだと思う。

おわりに

晩年まで健筆をふるっていた保荊瑞穂の八十三歳での逝去は、あまりにも早かった。百歳くらいまで生きられるのではないかとどこかで感じていて、パリ出張に出かけても、また機会があるだろうと暢気に構え、ついつい保荊瑞穂に連絡するのを先延ばしにしてしまっていた。ヴァレリー論をまとめて一冊の本としてお渡しし、学恩に報いることもできなかった。平均寿命は全うしたとはいえ、保荊には、まだまだ読みたい本や書きたいものがあつたに違いない。

二〇二一年十二月号の『すばる』には、ブルースト研究者の吉川一義と、筑摩書房元編集者の岩川哲司が保荊瑞穂追悼文を寄せている。吉川一義は、十年年長のブルースト研究者としての保荊の仕事の意義を描き、岩川哲司は、人間としての保荊、文学に真に培われ馥郁たる文人としての保荊を称揚し、哀悼している。図らずも、追悼文を草した二人が一致して保荊を「文人」と呼んでいる。「文人」という存在は、あるいはその観念は、専門分化が進み、慌ただしい現代からは消えかかっているものであるかも知れない。専門家や研究者はいる。小説家や評論家はいる。しかし「文人」と呼べる存在は世にどれほど数えられるのだろうか。ましてや大学教師にして「文人」であるというスタイルは、すっかり過去のものになってしまっているのではないだろうか。保荊の本連載は、「文人」のスタイルを貫いた散文として、近年に例を見ないものではないかと感じている。

保荊の文業と人となりふれ、学恩に与った大学教師として、何を引き継ぐことができるだろうか、と浅学非才なりに考えることがある。次のようなことであろうか。一つ一つの言葉を揺るがせにせず、フランス語のテキストに向かい合う

こと。何事によらず、「わかった」気にならないこと。むしろ「わかる」こと、説明のつくことに安住しないこと。全てをあるがままに受け止め、決して自分の間尺や流行の概念に合わせて「わかった」気にならないこと。常に全体を捉えること。長い歴史の流れの中で考えるとともに、集中力を持つて対象に向かうこと。感覚の純度を高めること。自らの感受性に訴えかけてくるものについて、「専門」の分類で遮断しないこと。芸術と自然に学ぶこと²⁴。保莉は、決してそのような言辞を弄したわけではなかったが、私が引き継ぎたいと感じたのは、師のそのような姿勢である。

「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」は、作家の言葉と人生が響き合い、また言葉が生み出されていく豊潤な循環のクリチュールである。文学には、「理解する」だけではなく、親しみ愛する対象としての意義がある。おそらくそれは、A Iにはプログラミングし難い次元のことではないだろうか。望むらくは、文学研究も「親しみ愛する」方法を伝えるものとして存在せんことを。「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」は知と愛が高度に統合された文学研究であり、文学評論であり、氏の人生を総括する形象としてある。

保莉瑞穂の冥福を祈りつつ、攔筆する。

-
- (1) Paul Valéry *Degas danse dessin*, 1932.
 - (2) Paul Valéry, *Introduction à la méthode de Leonard de Vinci*, 1895.
 - (3) 新潮文庫 一九七九年
 - (4) 東京大空襲で実家が焼かれてしまう前、父親の肩車で見た映画、疎開により途切れてしまった三味線の稽古のこと、歌舞伎座に連れて

- 行ってくれた深窓育ちの母親のことなど、幼年期を振り返る随想を保莉は残している。「母の膝」『すばる』二〇一八年十月号（集英社）。
- (5) アンドレ・マルロー（一九〇一—一九七六）は、フランスの作家、冒険家、政治家。ド・ゴール政権で長く文化相を務めた。著作に『人間の条件』『想像の美術館』など。
- (6) 亡くなった夫人の思い出に繋がる保莉のエッセイに「クレソン」（『文学界』二〇〇五年六月号 文芸春秋）がある。
- (7) 一九九四年頃のこと。
- (8) 本稿においては、保莉の「ポール・ヴァレリー 現代への遺言」の引用に際し（連載回―該当頁）の形で記す。
- (9) Paul Valéry « Le Cimetière marin » 1920. 訳文は保莉による。
- (10) 堀辰雄『風立ちぬ』初出一九三六年。本小説のエピグラフには、ポール・ヴァレリーの「海辺の墓地」の一節の堀による訳「風立ちぬ、いざ生きめやも」が掲げられている。フランス語原文は « Le vent se lève / Il faut tenter de vivre » である。
- (11) Michel Jarrey, *Paul Valéry*, Fayard, 2008.
- (12) 保莉は「たった一篇の詩や見事な散文、あるいは卓越した才気が、ある人のその後の人生を決定するということは人間の価値を地位や富でなく知性によって判断する文明の世界ではよくあること」と記し（3250）、ヴァレリーを、ルソーやレスピナス嬢に並ぶ例であると捉えている。
- (13) Antoine Lerais *Vous n'aurez pas ma haine*, Fayard, 2016.
- (14) 保莉瑞穂「ブルースト 印象と隠喩」の白眉である。
- (15) 保莉瑞穂「創造のさなかに 野田弘志―鉛筆画と油彩」『季刊みづる』一九八四年秋号
- (16) Paul Valéry, *Dialogue de l'arbre*, 1942.
- (17) 保莉は、「曰く「若者特有のスノビズム」で、大学初年次に書店で英詩の集められた洋書を買ひ求め、書物の佇まいに感興を覚えたエピ

ソードを語っているが、スノビズムに始まろうとも、自らの感覚の最も深いところで、無上の喜びとして書物を受け止めているのが印象的である。

(18) 須賀敦子『遠い朝の本たち』は一九九八年刊行。須賀敦子は六十歳を過ぎて初めての書物『ミラノ 霧の風景』を上梓し、一九九八年に逝去するまでの数年の間に珠玉の作品を残した。

(19) 須賀敦子『ユルスナールの靴』筑摩書房。一九九六年。

(20) 保莉がフランスに留学した当初、立ち塞がるように感じられたフランス精神については、連載第三目「黒い壁―フランス精神とは何か」で、コメディー・フランセーズでのラシーヌ悲劇の上演に圧倒されるとともに味わった疎外感、実際に目の前に立ち塞がったパリの黒い壁の描写を通して語られている。

(21) 日本では、ソメイヨシノも散った後、四月下旬頃に八重桜が咲くが、フランスの八重桜は、冬の終わりを告げるかのように、早春に咲く。

(22) ことに吉田健一『ヨオロッパの世紀末』（新潮社、一九七〇年）は国民国家が前面に出る十九世紀をむしろ墮落した時代であることを見、十八世紀のヨーロッパに美質を見る歴史観を提示した書物である。保莉は『ドガ ダンス デッサン』の講読の授業で、吉田健一の同書の翻訳（『ドガに就いて』のタイトルとなっている）について、「名文すぎて訳がわからないよ」と学生の語彙力と語学力では、直訳調を脱した吉田の訳文は、フランス語と日本語がどう対応しているか理解に苦しむよ、という意味で釘を刺されていたが、吉田健一への尊敬は十分に伝わってきた。ついにながら、保莉の話し言葉は、実にシンプルだった。「村上春樹はフランス語で読むとすごくいいね」とか「昔、あなたはgrace、graceって言うってたけど、それがフランスの真髄だってわかっているって、えらいな、と思った」とか（graceは優美・恩寵の意）。「メディアノの文体はモノトーンですわ」と言葉に向けた際には「でも、ほら、白と黒を並べるとききれいな絵になるじゃない」と返してくるとか。その何気ない眩きがなんと心に深く響き、懐かしいことか。

(23) 矢崎彦太郎『音を編む』『学燈』(丸善出版社、二〇二一年 秋号)

(24) 保苺は、文学だけでなく、他の分野の知人・友人を大切に人だったように思われる。保苺は画家や音楽家・料理人と懇意だった。